

町史だより

西原のいとはば〜その②〜

買い物ことばあれこれ

新年度・新学期がはじまり、清明祭（シメミ）、ゴールデンウィークと、何かと物入りなこの時期。みなさんのサイフの中身も、多少の出入りがあったのでは？

今回は買い物にまつわることばを紹介しましょう。

現在では大型店舗が店をかまえる西原ですが、明治三〇年ごろまでは商店もなく、買い物は首里や那覇のマチ（市場）まででかけていました。当時の西原は、首里の田舎と称されていた純農村ですから、農作物を売ったお金で日用品を購入していました。

しかし、車のない当時は、そうひんぱんにマチへ通えないので、行商人が訪れて田舎の人々の需要を満たしていたようです。明治の翁長村について記された比嘉春潮の『翁長旧事談』によると、表工にある行商人らが訪れていました。毎日くるのは豆腐屋と肉屋でした。

豆腐屋は翁長の部落内に二軒あって、毎朝豆腐を頭にのせ、「トーフコンソーラーニ（豆腐買い召されぬか）」と首里

言葉で呼び歩いていたそうです。肉は、ガージャウワサーと呼ばれる我謝の屠殺業者から、牛肉や豚肉を売りにきていたようです。

表I

| 商品名 | 行商人 | 村を訪ねる回数 |
|----------|-----------------|---------------|
| 豆腐 | 翁長の居留人（*注①） | 毎日 |
| 肉 | 我謝の屠殺業者に雇われた売り子 | 毎日 |
| 石油 | 首里の女 | 2～3日に1回 |
| タバコ | 首里の男 | 4～5日に1回 |
| 魚類 | 糸満の女、馬天や伊保の浜の漁師 | トビウオ、スルメなどの季節 |
| ヤマモモ、ミカン | 宜野湾の女 | ヤマモモやミカンの季節 |
| 塩 | 那覇の泊、泡瀬 | 随時 |

*注① 元々の村民ではなく、首里や那覇から移住してきた士族またはその子孫。

女性は頭に荷をのせるカミアチネー、男性は天秤棒（てんびんぼう）をかつくカタミニーで運んできました。

このほか、ウワーフグヤー（子豚の去勢をする者）や、ウーシアラサー（臼（うす）を目立てをする者）、ナービナクウ（鍋を

修理する者）とカンチャ（鍛冶屋）も訪れたといえます。

あるとき、「ヒートウヌシシ…（イルカの肉）」と呼び歩く行商の声を聞き、今でもあちこちの集落で聞くことができます。西原の人にとって、イルカ（ヒートウという方言）はあまり縁のない動物だったはずですから、納得ですよ。

行商人がきたとき、まず値段のかけひきからはじめたといえます。

値段をまけるとせしめるのをシジュンといい、値引きしないとがんばるのをイブユンといったようです。買ってもらうと、行商人はシーブン（おまけ）をどれだけ出すかによつて、客がついたりつかなくなったりしました。みなさんも、シーブンをもらった経験がありますか？

ほかに、ブックミーコイ（数人でひとかごを買ってわかる）や、ウッチ（売れ残り）ということばがあげられます。

商売はじめをミーグチといい、この時買う分量がわずかだったり、ひどい値切り方をされるのを行商人は非常に嫌ったとも記されています。

明治のおわりごろから、西原にもマチヤグワー（雜貨店）がでかはじめます。朝一番のお客さんは、アサミーグチといい、男性だとカリ（縁起がよい）として喜ばれたという話もあります。

新年を迎えた年はじめには、商売人も特に縁起をかつぐのか、親に頼まれ朝いちばんでお使いにきた女の子に、あからさまにイヤな顔をしたとかしなかつたとか…。

今でも、そういうことがあるのでしょうか？

【行商人】

店舗をかまえないで自ら商品を持ち、売り歩く人。物売り。

【参考文献】

『比嘉春潮全集』第三巻 文化・民俗編／『西原町史』第七巻・資料編六 西原の産業／『那覇市史』第二巻中の7 那覇の民俗／『沖縄語辞典』

◆◆◆お得な!お知らせ◆◆◆

『西原町史』が
セット価格 10,000円

町史7巻(第2・3・4・5・6・7巻、別巻)
付属刊行物(『戦災被災者記録』、『西原の自然』、ガイドマップ)

11,200円 ⇒ 10,000円 とお得です。
教育委員会生涯学習課(役場第2庁舎)
でもおもとめになれます。